

〔PBLの風と土 第32回〕

キャンパスを横断しつつ地域に根ざして

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授・立命館大学サービスラーニングセンター長）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でのPBL（Problem-Based Learning）の導入で知られており、現地から本連載を始めました。

連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにAAU以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、5年目からは米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題し、8年目となる2024年度は再び筆者の教育実践を紹介中です。

1. 回数を数えるより年中行事の回復を

「ホームランを数えてるうちは四番にはなれないぞ。」これは1981年から1986年にかけて小学館の『週刊少年サンデー』で連載された『タッチ』の1シーンであり、既に本誌「対人援助学マガジン57号」（2024年6月15日刊行）の「[短針](#)」欄にて筆者が紹介した一節である¹。あだち充先生の漫画で、アニメ化された作品でもあるため知る人も多いだろうが、作品の主題は早世した弟とバトンタッチして幼なじみを高校野球の頂点である甲子園に連れていこうとする物語である²。そして冒頭のフレーズは、県大会の決勝において、主人公の上杉達也（および弟の上杉和也）のライバル、新田明夫が県大会の決勝でチームメイト（2年生の大熊）に向かい、選手としての振る舞いをたしなめるように放つ言葉である。

令和6年能登半島地震から1年が経過した2月8日、筆者は石川県七尾市田鶴浜地区を訪れた際、昼食に訪れた店で出会った大学院生から、田鶴浜への訪問回数が尋ねられた。とっさに回答ができなかったが、5月までに12回だった能登への訪問は2月8日が25回目で、翌週にも訪問したために本稿執筆時点で26回に至っている。ただし、再び冒頭のフレーズを重ねてみれば、筆者にとって訪問回数を数えているうちはよい支援者にはなれない、という構えで臨んでいるつもりである。もちろん、可能な限り頻繁に通い、いわゆるラポール（rapport）と呼ばれるような信頼関係の構築に努めているもの

の、ただ訪問回数が増えれば必ず信用が高まるとは言えないのが支援の本質ではなかろうか。

2024年度は10月23日に新潟県中越地震から20年、そして1月17日には阪神・淡路大震災から30年を迎えることになった。担当授業の関係で、10月23日には長きにわたり訪問を重ねている小千谷市塩谷集落での慰霊祭への参列は叶わなかったが、2025年1月1日は田鶴浜での追悼行事「たつるはまのつどい」に参列させていただいた。また、1月17日には30年前に立命館大学ボランティア情報交流センターで活動した仲間と神戸で時間を共に過ごした。何より、この30年、神戸での活動の後、とりわけ塩谷集落との交わりと関わりを通して、年中行事が滞りなく行われることが復興を成し遂げられた証の1つであるという実感を抱いているため、田鶴浜でも田植えや夏の「田鶴浜あかりまつり」、さらには2月16日に順延となった七尾市（旧田鶴浜町）の無形民俗文化財に指定されている



写真1：追悼企画「たつるはまのつどい」での1場面（筆者撮影、2025年1月1日）

「田鶴浜左義長まつり」などに参加させていただいてきた。

そうして現場に向き合う上での知恵は、災害で被災された地域への支援だけでなく、ボランティア活動を組み込んだ教育プログラムとして展開されるサービス・ラーニング手法による各種の教育実践のフィールドに対しても活かしてきたつもりである。実際、2024年度の本連載では、[前々回](#)は京都の三大祭の1つである時代祭について、[前回](#)は立命館大学衣笠キャンパスに隣接する京都府立堂本印象美術館での取り組みを紹介する中で、授業の設計で工夫した点について論じてきた。そこで今回は、前回の予告のとおり、今回はキャンパス内および近隣をフィールドとした教育実践を取り上げ、この間、焦点を当ててきた大学と地域とのパートナーシップの構築についての議論をより深めていくこととしたい。

2. 学生を被害者にも加害者にもせずに

筆者が立命館大学に専任教員として着任したのは2011年度である。折しも着任直前には東日本大震災が発生したため、阪神・淡路大震災当時の経験を踏まえつつ学園本部での災害復興支援室の設立・運営に携わったこと、加えて一連の支援活動を教育実践に積極的に組み込んだこと、これらについては既に本連載 ([第29回](#)) で述べたとおりである。ただし、筆者が2011年度に着任となった背景には、2012年度から立命館大学における教養教育の体系を抜本的に改革することが決定しており、その具体化を図らねばならない状況があった。そこで、既存科目について「国内外および本学自体の動向を見つつ、サービスラーニングセンター提供の科目群についても不断の検討が進められ」、「学内外の諸機関との効果的な協働を図りつつ、時代の要請する問題解決」を焦点とした「社会で学ぶ自己形成科目」をキャリア教育科目と並んで教養C群として位置づけて開講する準備を重ねていった ([山口ら, 2015, p.131](#))

2012年度のカリキュラム改革では、フィールドでの活動を伴う新たな科目として「ソーシャル・コラボレーション演習」と「シチズンシップ・スタディーズII」、体験学習法を体感

する科目として「現代社会のフィールドワーク」を開発・提供することにした。これらの科目が開講される以前の立命館大学におけるサービスラーニング科目は、本連載[第30回](#)でも紹介したとおり、2005年の文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）の採択を経て2006年度から講義系科目の「地域参加活動入門」と実習系科目の「地域活性化ボランティア」、そして後にVCTPの略称が多用されていった5科目10単位のパッケージ型履修による「ボランティアコーディネーター養成プログラム」が提供されてきた。[山口ら \(2015\)](#) でも記したが、これらの既存科目のもと、VCTPにおけるNPO・NGO・ボランティア団体でのインターンシップ部分のみキャリア教育センターとの共通科目「全学インターンシップ」として継承の上でパッケージ科目としては2012年度で閉講し、前掲の3科目を新規に開講、そして「地域参加活動入門」は「地域参加学習入門」に、さらに「地域活性化ボランティア」は「シチズンシップ・スタディーズ」と位置づけて、従来通りの受入団体から活動計画が提示されるものを「シチズンシップ・スタディーズI」に、そして学生らが自ら活動計画を立案して実施するものを「シチズンシップ・スタディーズII」として新規科目との連続・発展的な展開を企図したのである。この2012年度の改革によるカリキュラムでは、これら6科目を図2のとおり「教学上の密度と現場への深度の2軸から科目の性格付け」 ([山口, 2019, p.19](#)) のもと、2020年度に再度のカリキュラム改革がなされるまで、8年間にわたって展開されていった。

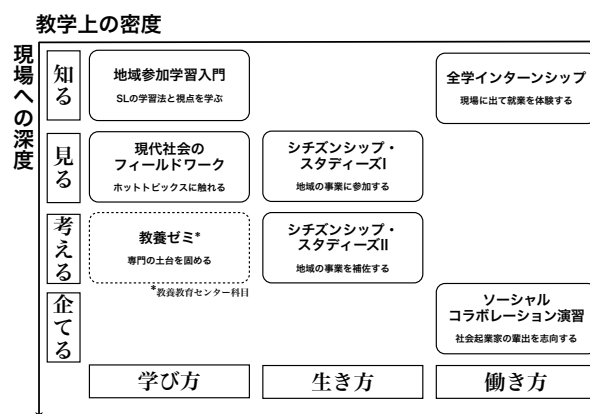


図1：2012年度から2020年度までの立命館大学サービスラーニングセンター正課科目群 ([山口, 2019, p.11](#)、筆者作成)

表1：ソーシャル・コラボレーション演習での取組
(筆者作成、写真も筆者撮影)

年度	協働	活動	一場面
2013	学生オフィス	学生オフィスに紹介を受け近隣の寺院でインタビュー。地域の方々との交流促進を目的とした企画「縁カフェ」を開催。	地域の方々との交流  2013.11.26
2014	一貫教育課	附属校出身の受講生を中心に「受験のないあなたへ」と題した学習啓発事業を検討。一貫教育部に提案（導入には至らず）。	一貫教育課から総評  2015.1.13
2015	衣笠キャンパス	衣笠キャンパス事務局より隣接地懇談会の内容を説明。地域の方々の声を聞き取り、ペットボトルタワーで展示し学生と共有。	実施後の成果報告会  2016.1.19
2016	衣笠キャンパス(KIC)事務局	衣笠キャンパス事務局よりゴミ分別と全面禁煙の不徹底および自転車マナー低下の実績数値を説明。啓発ポスター等を作成・配布。	チラシでの啓発活動  2017.1.10
2018	KIC地域連携課	地域連携課長が大学地域貢献の意義を説明。警備員数が増える中、喫煙・自転車マナー向上や外国人偏見解消の交流企画を提案。	警備員らの声の紹介  2019.1.15
2019	京都府立堂本印象美術館	堂本印象美術館が来館者増加の提案を期待。SNS・旧堂本印象邸・カフェ空間活用その他、紹介映像に英語・中国語字幕付与など実施。	下河邊副館長の挨拶  2020.1.7
2020		堂本印象美術館が来館者増加の提案を期待。アクセス動画提供、大判ポスター製作・バッジ贈呈・Tシャツ試作その他、新企画も提案。	来館記念バッジ制作  2021.1.22
2021		堂本印象美術館が来館者増加の提案を期待。コロナ禍のハイブリッド授業で、アンケート調査、SNS活用、落語研究会の動画制作等。	各チームの相互評価  2022.1.18

表2：シチズンシップ・スタディーズIIでの取組
(筆者作成、写真も筆者撮影)

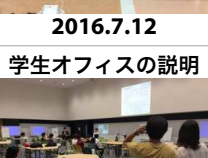
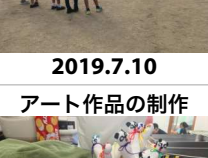
年度	活動	一場面
2013	山崎有恒先生らを招き、京都の魅力掘り起こす観光コースを検討する講座「夏の京旅ゆめ気分～仲間を見つけて旅行だぼん～」を開催。夏休みに実際に観光。	山崎有恒先生の講話  2013.7.2
2014	七夕の時期に「夢、希望」を短冊に書いて、と呼びかけて、講義棟（敬学館）に許可を得て笹を設置。内容の集計を東北（気仙沼）復興策検討会と併せて実施。	講義棟入口の笹  2014.7.8
2015	<言うまでもないけど、苟立つこと!>をGoogleフォームで募集。「怒(おこ)りっつ」と題して発表し、投票を通じて日々の学生生活を見つめ直す機会を創出。	投票結果の集計作業  2015.7.21
2016	典型的でないキャリアのトーク企画を実施。水道局職員から高校・大学教員、ご当地アイドル、イラストレーター、僧侶&会社経営者&バーテンダーの4名を。	企画当日の集合写真  2016.7.12
2018	大阪いばらきキャンパス(OIC)で夏からでも加入可能なサークルの合同歓迎会を開催。学生オフィスと地域連携課の職員を招き、新規団体設立等の意見交換も。	学生オフィスの説明  2018.7.11
2019	OICの立地特性に鑑み、茨木市の小学生や留学生を対象とした運動会を実施。多世代交流と多様性の尊重のため、使用言語を英語のみに限定して競技を展開。	英語で長縄跳び  2019.7.10
2020	コロナ禍で座学はオンライン実施。企画はZoom交流会、OIC周辺で営業中の飲食店情報のリサーチ、加えて対面で「放課後こども教室」で手芸による交流も。	アート作品の制作  2020.7.3
2021	4/25～6/20の緊急事態宣言で対面からオンラインに切替。解除後にハイブリッドで「真夏の激アツパーティーDX」と題し複数のミニゲーム大会を実施。	ゲームの説明中  2021.7.14

表1は筆者が担当した「ソーシャル・コラボレーション演習」での取組内容である³。既に前回の連載（第31回）で2019年度以降の京都府立堂本印象美術館とのパートナーシップについて紹介する際に簡単に紹介したが、そもそこの科目は、図2での配置のとおり、教学上の密度も濃く、活動時には現場への深度も深い科目であり、いわゆるPBL型での授業展開により社会起業家の輩出を志向した。そのため、具体的な協働のパートナーを定め、現場からの課題を提示いただくことにより、具体的な問題を定め、その解決策を企画・検討し、実施することにした。表1で示した取組は全て衣笠キャンパスで開講されたクラスでの内容だが、この科目で開講当初から学内の諸機関と連携することにしたのは、学生たちにとっての身近な課題を取り扱うことと社会的な課題の認識と具体的な問題解決には当事者意識を持つことが肝要であり、特に通学・修学にあたってのマナーの向上にあたっては学生どうしのあいだでも加害者や被害者になることについての自覚と責任を促すことを踏まえたことによる⁴。

続いて表2は筆者が担当した「シチズンシップ・スタディーズII」の取組内容である⁵。これまで本連載でも、また筆者のその他の原稿等でも「シチズンシップ・スタディーズI」については積極的に紹介してきたが、担当教員による講義と受講生による試行的実識を重ねることで、コミュニケーションとリーダーシップの素養を高めることを目的とした「シチズンシップ・スタディーズII」の取組について紹介するのは本連載が初の機会である。なお、表2に記したのは最終的な企画内容であるが、各年度に共通するカリキュラム設計として、概ね5月の大型連休の直前となる第3回目授業は「5月病への予防注射」というコンセプトで入学間もない1回生を対象とした交流企画を実施するように投げかけていた。それにより、企画立案と実施と評価を1サイクル体験することができるため、その実体験をもとに行う通算で2回目となる企画立案では、受講生どうしが互いの関心・特技・経験を踏まえたチームビルディングを行うものの、むしろ自由にテーマを設定できるということがある種の不自由さに縛られることを痛感す

ることで、科目名に含めた「シチズンシップ」の深い理解へとつながったと授業担当者としては捉えている⁶。

3. 生活環境を学びの場にする

こうして有意義な展開がなされてきた立命館大学のサービスラーニング科目は、2020年に実施されるカリキュラム改革を前に、2018年7月2日に開催された「第2回教養教育改革具体化検討委員会」での議論を踏まえ「近接科目の整理」が求められることになった。その時点で、既に「シチズンシップ・スタディーズ」のIとIIを統合し、サービスラーニング手法に基づいて自主企画の要素を抑えた活動計画のもと1セメスターで完結する科目を新たに「シチズンシップ・スタディーズ」として位置づけ、IIにおいて重視していた学生の選択による自主活動部分は「ソーシャル・コラボレーション演習」においても組み込むことで2科目の合併を想定していた。そして、1科目が閉講となることで、授業時間内に授業サポーター（ES）の学生のコーディネートのもとで行う2回のボランティア体験の言語化を図る新科目「現代社会とボランティア」を開設することになっていた。ところが、新生の「シチズンシップ・スタディーズ」と合併後の「ソーシャル・コラボレーション演習」が、共に両科目ともクラス定員30名の演習系科目であること、カリキュラムの性格づけの上で「自己表現力」以外は同様の特徴であるとして再検討が求められたのである⁷。

結果として2020年度以降のサービスラーニング科目は講義系「地域参加学習入門」、体験

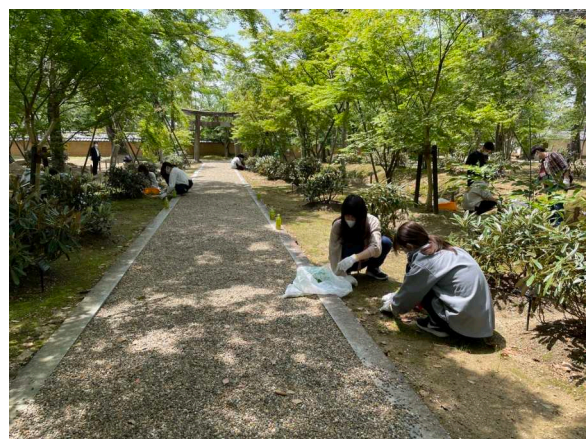
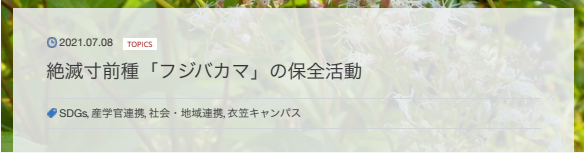


写真2：「現代社会とボランティア」での仁和寺境内清掃（2021年5月21日、筆者撮影／本誌第45号執筆短信の再掲）

の言語化を行う演習系「現代社会とボランティア」、科学的かつ独創的に課題を探究する演習系「現代社会のフィールドワーク」、現場の方々との共創を図る演習系「シチズンシップ・スタディーズ」の4科目での展開となった。そこで、表1のとおり「ソーシャル・コラボレーション演習」において、イコール・パートナーとして協働を図ってきた現場との関係性を4科目の全般にわたり浸透させていくことにこそ、サービスラーニングセンターの存在意義が反映する、と捉えるようにした。ところが、ここに想定外の事態が発生した。コロナ禍である。

新カリキュラムが導入される2020年度にコロナ禍に見舞われることにより、軒並み体験を伴う科目は当初の設計のように展開できなくなった。2021年度もまた、政府による緊急事態宣言が断続的に発出された。そのため、特に新生入生にとっては入学した大学のキャンパスに母校としての愛着が持てなくなるのでは、と危惧を抱いた。そこで、本誌第45号の執筆者短信で紹介したように、新設の「現代社会とボランティア」において、仁和寺境内の清掃活動や御室小学校での下校時の見守り活動などを通じてボランティアの実体験を重ね、その体験をオンラインにて言語化を図ることにした。

教室での授業を前提としない授業だからこそ学びの場を生活世界に広げることができたのは、コロナ禍において新カリキュラムが開講されたからこそと筆者は確信している。加えて「ソーシャル・コラボレーション演習」が閉講となったからこそ、従前に協働していた各機関とのあいだで、さらなる協働の可能性を相談する契機を得ることができた。そして前回（第31回）の結語も触れたとおり、「教室で学ぶことができない」という特殊状況が新たな学習環境を創出する契機となったのである。とりわけ2021年に衣笠キャンパス地域連携課と取り組んだ「嵐電沿線フジバカマプロジェクト」の継続的な展開は、5月の挿し芽、6月末から7月上旬の移し替え、その後は8月に水やりの継続、10月は嵐電嵐山駅での足湯、そして11月に小学生らに呼びかけて匂い袋づくりと、1年を通じた活動サイクルが確立されるようになった。



2021.07.08 TOPICS

絶滅寸前種「フジバカマ」の保全活動

SDGs 産学官連携、社会・地域連携、衣笠キャンパス

立命館大学衣笠キャンパスでは、京都府の絶滅寸前種に指定されている「フジバカマ（藤袴）」を増やす取り組みを進めています。

秋の七草の一つ「フジバカマ」。夏の終わりに秋の始め頃、藤色の小さな花を扇状に咲かせます。日本書紀や万葉集、源氏物語にも登場し、古くから身近な山野草として日本人に愛されてきましたが、近年では自生に適した環境が少なくなり、絶滅寸前種となるまで数を減らしました。

立命館大学では、2020年7月に、公益財団法人京都市都市緑化協会からフジバカマの原種の苗を衣笠キャンパスで受け入れ、学生や教職員、近隣住民と連携して育ててきました。

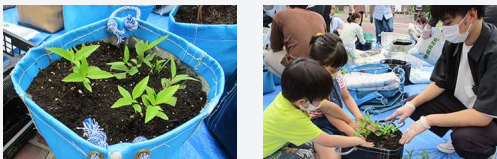


2021年には京福電気鉄道およびボランティア団体「嵐電沿線緑化プロジェクト」と連携し、育てたフジバカマを嵐電の駅緑化にもつなげる取り組みをはじめました。

2021年5月22日（土）からは、衣笠キャンパスで育てたフジバカマに加え、活動に賛同いただいた「藤氏藤袴の会」と「深草藤袴の会」から提供を受けたフジバカマで挿し芽を作り、育苗ポットで育ててきました。

2021年7月3日（土）には、商業予定だった消防用ホースを再利用したプランターを活用し、学生・京福電気鉄道・地域住民と育てた挿し芽を71個のプランターに移し替える作業を行いました。

今後、学生団体が水やりなどを行い、開花シーズンの9月～10月頃には、育てたフジバカマを嵐電の駅や衣笠キャンパス内に飾る予定です。もしかすると、海を越えて飛んでくる美しいチョウ「アサギマダラ」とフジバカマの共演が、秋の衣笠キャンパスで見られるかもしれません。



※絶滅寸前種のフジバカマの保全は、SDGsの目標15「生物多様性損失の阻止」達成を目指すとともに、地域連携で取り組むことがSDGsの目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」を目指すものであることを認識し、取り組んでいます。

写真3：「絶滅寸前種フジバカマの保全活動」
（立命館大学ホームページ「TOPICS」2021年7月8日）
（<https://www.ritsumei.ac.jp/news/detail/?id=2159>）

4. 学びのコミュニティの生滅流転

以上、今回はキャンパス内および近隣をフィールドとした教育実践を取り上げた。とりわけボランティアやインターンシップなど、直接的な体験や実習は学外での実施を前提とされることが多いのではなからうか。しかし、学生たちにとって最も身近なキャンパス内および近隣をフィールドとすることで、学習者であり生活者としての自らの存在を実感することができ



本連載では複数回にわたってSOFARモデル (Bringle, 2009) によりサービス・ラーニングのステイクホルダーについて関心を向けてきているが、2024年度の衣笠キャンパスでの「シチズンシップ・スタディーズ」の4つの活動をSOFARモデルで分析した論考が2025年3月に刊行予定（大場ら、印刷中）である。そこ

で今回をもって本連載での筆者の教育実践の紹介は一区切りをつけることとする。次回以降は筆者が対人援助の領域での教育実践を分析する上で採用可能な新たな理論的・方法論的観点について、文献の解題などにより紹介していく。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

- 大場茂生・加藤晶洋・久保裕之・櫻井稔也・田中真也・三ツ野直樹・山口洋典. 印刷中. キャンパス隣地・近隣とのパートナーシップの推進を通じた教学の充実：衣笠キャンパスにおける歴史・文化的なプログラムの構築を事例に. [立命館高等教育研究](#) 25. Bringle, R. G., Clayton, P. H., and Price, M. F. 2009. Partnerships in service learning and civic engagement.: A Journal of Service Learning & Civic Engagement, 1(1), 1-20.
- 豊浦美紀. 2023. 大学のキャンパスを拠点に、ごみ分別から建物清掃まで行う：株式会社立命館びらす(京都府). 働く広場, 543, 6-11.
- 山口洋典・河井亨・桑名恵・川中大輔. 2015. 地域参加を促す系統的な履修プログラムの体系化の方途. [立命館高等教育研究](#) 15, 129-144.
- 山口洋典. 2019. 参加型学習における問題解決活動と教育実践の相即：立命館大学とデンマーク・オールボー大学との比較研究を通じた理論と方法論の検討. [ボランティア学研究](#), 19, 7-22.

【注】

- 1 その際に紹介した折には、手元にあった単行本（少年サンデーコミックスワイド版）をもとに第10巻の第18話を出典としたが、単行本の初出はサンデーコミックス版の第23巻（p.178）である。全258話のうち228話に登場するもので、名言として取り上げられるものの1つである。
- 2 この『タッチ』に対しては野球漫画として主人公が周囲の人間や環境との関わりの中で成長するという「スポ根」（スポーツと根性）と、双子の兄弟と隣家の幼なじみとのあいだでの「ラブコメ」（恋愛と喜劇）の要素が混ざった作品という評価がある。簡便に読めるものとして、島田一志（2020）[「あだち充『タッチ』は極めて80年代的なスポ根漫画だった——上杉達也が見せた"ド根性"」](#)があるので触れておく。
- 3 本科目において2017年度が欠落しているのは、筆者がデンマークのオールボー大学に立命館大学の学外研究制度により滞在したため、科目を担当しなかったためである。なお、2015年度に課題の提示をいただいた相根誠・衣笠キャンパス事務局長（当時）は、激務もあって2016年11月1日付で事務局長の立場を離れられた後、逝去された。本連載の第31回でも触れたとおり、長きにわたり衣笠キャンパスは隣接地とのあいだで緊張関係の高い状態にあった。そうした中であって、相根さんには学生たちによる積極的な挑戦を丁寧に支えていただいた。ここに記して謝意を表したい。
- 4 例えば、自転車通学者が事故や盗難に遭うとき、学生どうしのあいだで加害者・被害者の関係が成立することがある。このような事態を想定したとき、2003年に発表されたMr.Childrenの楽曲「タガタメ」の一節「子供らを被害者に／加害者にもせずにこの街で暮らすため／まず何をすべきだろう?」を思い浮かべることがあった。このレトリックを手がかりとして、学生たちには「すべきこと」よりも「できること」を探るよう促しつつ、学生どうしが「したい」というモチベーションが喚起されるよう、授業では対話を重視して授業を進行した。
- 5 本科目においても2017年度が欠落しているのは、筆者がデンマークのオールボー大学に立命館大学の学外研究制度により滞在したため、科目を担当しなかったためである。なお、2013年度に受講生からの協力要請に応じていただいた[山崎有恒](#)・文学部教授は、2024年11月21日に出張先の台湾で逝去された。2013年7月2日の話題提供では「京都水紀行」というテーマのもと、2つのモデルコースを提示いただき、京都で学ぶからこそ日常的に触れることができる歴史的・文化的な魅力について、豊かな語り口によって受講生はもとより一般公募で参加した学生たちの興味を駆り立ててくださった。近年は動画を通じた講座なども多面的に展開される中、折に触れて体調が優れないとお話になられていたものの、急逝に哀悼の意を表したい。
- 6 このような総括を行ったものの、前述のとおり、カリキュラム構築の当初はシチズンシップ・スタディーズIの受講生が継続受講を行い、かつての活動先で新たな企画の実施を行えるようにすることを企図していた。しかし、実際にはシチズンシップ・スタディーズIIのみを履修する受講生が多かったため、独立性を担保した授業運営を図ることとした。
- 7 [2020年度教養教育改革](#)では、知識力、科学的考察力、総合的解釈力、洞察力、指針の確立、創造性、多様性・国際性、自己表現力、共創する力の9つの観点で特徴づけを行うことが求められた。このうち、シチズンシップ・スタディーズに対してソーシャル・コラボレーション演習では自己表現力が1段階高い水準として位置づけた。なお、これら9項目では、サービスラーニング手法において活動先とのパートナーシップ構築の前提として、活動先から具体的な活動計画が提示される科目と、課題のみ提示されて実際に生じている問題の分析を行った上で活動の企画検討と具体化を図る科目と、いわゆる課題探求の手法の違いは顕在化しえない。科目は講義系か演習系かの2分法だけでは区別しえないことを象徴する議論と言える。